研究主題　**資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む**

授業の在り方に関する研究（1 年次）

―「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を通してー

【２年研究】

中学校・高等学校　英語科

【研究担当者】　髙橋　成周　　寒河江　研哉
【この研究に対する問い合わせ先】
電話 0198-27-2735　FAX 0198-27-3562
E-mail　kyouka-r@center.iwate-ed.jp

Ⅰ　はじめに

平成 28 年 12 月，「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（以下「答申」という）」(2016)が出されました。

これからの社会を創り出していく子供たちに求められる資質・能力とは何かを，学習する子供の視点に立ち，教育課程全体や各教科等の学びを通じて『何ができるようになるのか』という観点から，育成を目指す資質・能力を以下の三つの柱（以下「三つの柱」という）で整理しています。

①「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
③「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力，人間性等」の涵養）」

これら「三つの柱」をバランスよく育むためには，『何を学ぶのか』という指導内容等の見直しとともに，それらを『どのように学ぶのか』という子供たちの具体的な学びの姿について「アクティブ・ラーニング」の視点からの見直しが欠かせないものとしています。

こうした流れを受け，本研究では，「三つの柱」を総合的に育むことを目指し，**「主体的・対話的で深い学び」**の実現に向けた「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善の考え方について，授業改善の方策を構想し，実践を通して検証することにしました。ただし，指導法を一定の型にはめ，狭い意味での授業方法や授業技術の改善に終始しないように留意し，提示したいと思います。

Ⅱ　英語科における資質・能力について

「答申」（2016）では，英語科で育成を目指す資質・能力について，三つの柱に沿った整理を行い，下の表のとおりまとめました。これらをどれか一つに絞って育成するのではなく，三つの柱として総合的に育成することが求められています。

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力，人間性等
○外国語の特徴やきまりに関する理解 ○言語の働き，役割に関する理解 ・コミュニケーションを円滑にする ・気持ちを伝える ・情報を伝える ・考えや意図を伝える ・相手の行動を促す ※各言語活動に応じた言語の働き ○外国語の音声，語彙・表現，文法の知識を，「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を活用した実際のコミュニケーションにおいて運用する技能 など	◆外国語で，情報や考えなどを表現し伝え合う力 ○コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて，幅広い話題について，外国語を聞いたり読んだりして情報や考えなどを的確に理解するコミュニケーション力 ○コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて，幅広い話題について，外国語を話したり書いたりして情報や考えなどを適切に表現するコミュニケーション力 ○外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して，外国語で話したり書いたりして情報や考えなどの概要・詳細・意図を伝え合うコミュニケーション力 ◆考えの形成，整理 ○目的等に応じて，外国語の情報を選択したり抽出したりする力 ○知識や得た情報を活用して，自分の意見や考えを外国語で形成・整理・再構築する力 ○形成・整理・再構築した自分の意見や考えを，実際に外国語で表現する力 など	○外国語を通じて，言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度 ○自律的・主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度 ○他者を尊重し，聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら，外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して，情報や考えなどを外国語で話したり書いたりして表現しようとする態度 ○外国語を通じて積極的に人や社会と関わり，自己を表現するとともに他者を理解するなど互いの存在について理解を深め，尊重しようとする態度 など

Ⅲ　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

●ポイント１（英語科における見方・考え方について）
ガイドブック（p6）に，英語科における「深い学び」に結びつけるための「見方・考え方」について捉え，その考え方を示しました。

◆「見方・考え方」とは“どのような視点で物事を捉え，どのような考え方で思考していくか”という，物事を捉える視点や考え方のこと

英語科においては，この「見方・考え方」を，「他者とコミュニケーションを行う力を育成する」観点から，次のように整理されています。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」
外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて，情報や自分の考えなどを形成，整理，再構築すること

※英語科における「見方・考え方」の具体例は，報告書・ガイドブックを参照してください。

●ポイント２（英語科におけるアクティブ・ラーニングの視点による手立て）
ガイドブック（p9）に，英語科における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための，本研究における手立てを示しました。

【表３】「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

		「アクティブ・ラーニング」の視点による手立て
「主体的な学び」の実現に向けて	○外国語を学ぶことに興味や関心を持ち，どのように社会や世界と関わり，学んだことを生涯にわたってどのように学んだことを生かそうとするかについて，見通しを持って粘り強く取り組むこと ○自分の意見や考えを発信したり評価したりするために，自らの学習のまとめを振り返り，次の学習につなげること	○コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し，身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定する ○本単元で目指す姿について，ルーブリックを用いて生徒と共有し，生徒自身が自分の学びの成果を捉えられるようにする ○振り返り場面を設定し，言語面（内容面）での振り返りをワークシートに記入させる。また，書いたことを発表させ，学んだことを共有化する ○CAN-DO リストを基にどのような力が身につけばよいか明確に示し，教師が生徒と学習到達目標を共有する ○ゴール像から逆算した授業のバックワード・デザインを行う
「対話的な学び」の実現に向けて	○他者を尊重した対話的な学びの中で，社会や世界との関わりを通じて情報や考えなどを伝え合う言語活動の改善・充実を図ること ○言語の果たす役割として他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成する観点を資質・能力全体を貫く軸として重視すること ○コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて，他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場面を計画的に設けること	○題材について理解したり，意見や考えを交流したりする場面を設定する。（例：Teacher Talk や Oral Introduction など） ○それぞれの活動の目的に合わせて，ペア活動やグループ活動など学習形態を工夫する ・相手を換え，対話する機会を増やす ○お互いの存在や考えを尊重するなど，相手意識をもたせ，安心して言語活動に取り組む親和関係を築く ○ゴールを達成するためのステップを踏んだ言語活動を設定する
「深い学び」の実現に向けて	○言語の働きや役割に関する理解，外国語の音声，語彙・表現，文法の知識や，それらの知識を五つの領域において実際のコミュニケーションで運用する力を習得し，実際に活用して，情報や自分の考えなどを書いたり話したりすること ○外国語教育において育まれる「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現し，学習内容を深く理解し，学習への動機付け等がされる「深い学び」につながり，資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮されるようにすること	○教科書の内容について読み取ったことや，自分の気持ちや考えなど相手に伝えたいことについて，発表したり対話したりするなど，アウトプットを目指した，統合的な言語活動を行う ○身に付けた知識・技能の「定着・発展」を目指すために，目的・場面・状況を明確にした，実際のコミュニケーション場面に近づけた言語活動を設定する

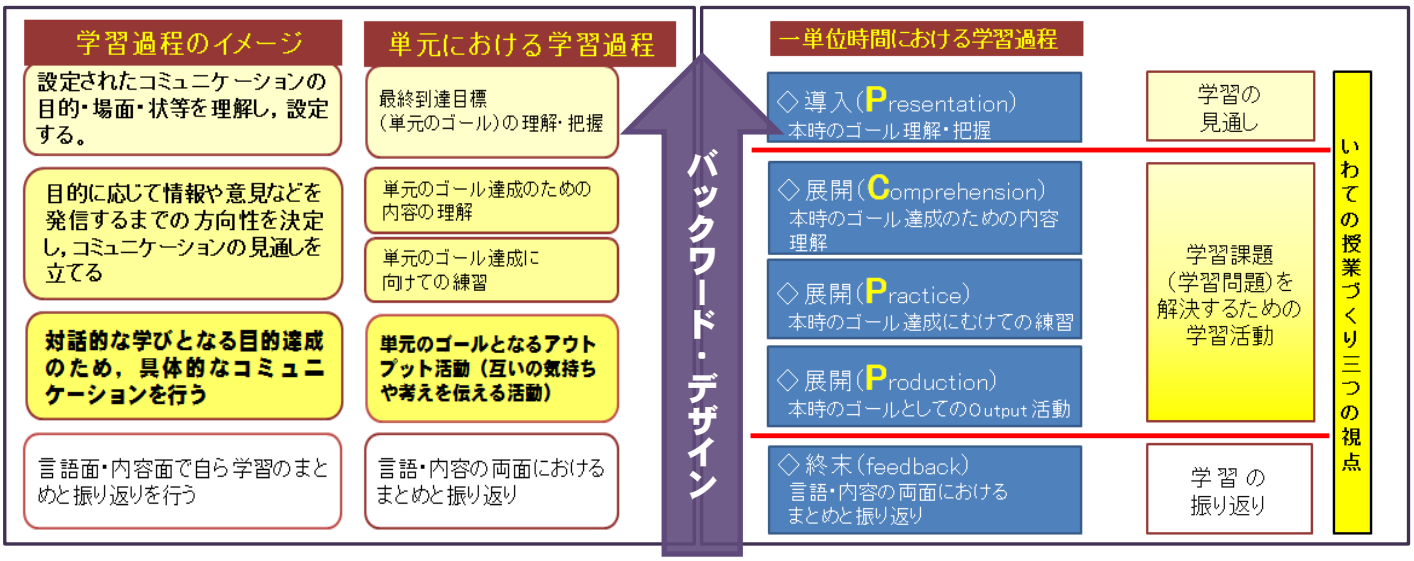
「アクティブ・ラーニング」の視点からの不断の授業改善を！
◆子供たちに求められる資質・能力を育むために，必要な学びの在り方を考え，授業の工夫・改善を重ねていくことを大切にしましょう。

※全体を通して
○教室を「安心・安全・挑戦」の場にするために，褒めたり励ましたりするなどのプラスの声がけを続ける。

●ポイント３（学習過程の考え方について）
ガイドブック（pp10～12）に，「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習過程の考え方を示しました。（単元の具体例は p11 に，一単位時間の具体例は p12 に記載しています。）

次期学習指導要領では，資質・能力の育成を図るために，単元全体を通して「英語を使って何ができるようになるか」を明確にし，ゴールの姿から逆算して考える，バックワード・デザインが重要です。

また，振り返りでは，生徒に自分の言葉でまとめ，発表させ共有することで，より深い理解につなげられます。また，話したことを書かせる統合的な活動を取り入れることにより，定着を図ることができます。



●ポイント４（学習評価の考え方について）
ガイドブック(pp13～15)に，「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習評価の考え方について示しました。

【本実践における基本的な評価の考え方】
ア　学習評価の目的は，「学習成果の把握」「教員の指導改善」「学習者の学びの推進力」とする。
イ　評価の観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点とする。
ウ　単元の中に，学習・指導方法と評価の場面を適切に組み入れる。
エ　評価規準は「子供たちにどういった力が身に付いたか」を子供の姿として示す。
オ　単元に課題解決的な言語活動を位置付け，パフォーマンス評価を行っていく。
カ　学習活動の中に自己評価を位置づける。

◆学んだことを「知っている」だけでなく，「使える」力までつけたいと考えると，知識を測るペーパーテストだけでは不十分であり，知識や技能を状況に応じて活用する，パフォーマンスを評価する必要があります。
◆中学校の実践では，パフォーマンス課題を設定し，その観点や基準を示すルーブリックを作成し，生徒自身が，自分の学びの成果を捉えられるようにしました。

観点／評価	A	B	C
・内容	自分の家族について，自分が紹介したい情報やその人についてどう思っているかなどの気持ちを取り入れた，まとまりのある発表内容である。	自分の家族について，自分が紹介したい情報についてまとめた発表内容である。	自分の家族について，情報量が少なく，同じ内容のことしか伝えていない。
・伝え方	相手にわかりやすく伝えるために①～④の手段を3つ以上使いながら，間を空けずに対話を40秒以上続けることができる。	沈黙(間)ができることはあるが，①～④の手段のうち，2つ以上使いながら，対話を40秒以上続けることができる。	相手を引きつけるためのAにあげた①～④の手段を使うことができず，40秒以上対話を続けることができない。 会話が止まってしまうと自分から立て直せず，先生の手助けが必要になる。
	①相手の表情を見ながら会話する。 ②強調したい単語は強くゆっくりと伝える。 ③言いたいことが言えないときには，ジェスチャーなどを使う。 ④間を空けないように，つなぎ言葉を使ったり質問したりする。		

アメリカからきた転校生に，家族について紹介するためのルーブリック（中学校の実践より）

Ⅳ　理論構築のための実践事例

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた，「アクティブ・ラーニング」の視点（ガイドブック p9）を取り入れ，中・高等学校で実践を行いました。

下の「本時の展開」に記載した通り，導入・展開・終末の場面において，三つの学びの視点をどのように取り入れたかを示しています。

【中学校の授業実践】

【本時の展開　5／8時間目】

過程	学習活動 予想される生徒の姿	三つの視点による実践内容・指導上の留意点
導入 （6分）	1　90秒クイズを行う 2　マップの確認 3　本時の学習到達目標の確認	【実践内容　1】 ・本時のゴールについて，ゴール像を示し，見通しをもたせる。
	Today's goal：シャチの生態について，キーワードを基に友だちに伝えることができる。	
展開 （34分）	4　マップ発表の個人練習 ・自分が作成してきたマッピングについて，40秒話しきることができるように練習する。 5　マップ発表 ・前列，後列で2列つくる。 ・交互に発表する。 ・時計回りで3回行う。 6　発表の振り返り ・記入したことについて，数名発表する。 ・全体の前で発表する。 ◎シャチの生態について，マップを頼りに，なるべく見ないで40秒話している。 ・自分で作ったマップがないと，シャチの生態について，全く話すことができない。	【実践内容　6】 ・話し手は相手に伝わるように，聞き手は聞き取ったことが伝わるように，それぞれ相手意識をもちながらやりとりすることで，協働性を高め，親和関係を育成し，自分の気持ちや考えを伝え合うコミュニケーション力を高める。 【実践内容　7】 ・ペアを何度も変えながら，発表させることで，お互いの発表から伝えたい内容や表現を交流することを通して，内容について整理し，再構築を図る。
終末 （10分）	7　振り返り (1)　シャチの生態について，まとめて話したことについて書く。 (2)　振り返りシートに学んだことを記入し，交流する。 8　次時の見通しをもつ	【実践内容　3】 ・振り返りシートを基に，本時の授業で気づいたこと，また，ペア学習を通して学んだことを記述・発表し，学んだことを共有化する。

【高等学校の授業実践】

7　本時の実際

【本時の展開1／7時間目】

(1) 目標　50億羽もいたリョコウバトが絶滅した理由を英語で簡潔に説明できる。

(2) 展開

過程	学習活動 予想される生徒の姿	三つの視点による実践内容・指導上の留意点
導入（10分）	1　絶滅が危惧されている動物に関するブレインストーミング。 2　写真を提示しながら絶滅（危惧）種に対する意識を高める。 3　本時の学習到達目標と単元の最終到達目標の提示。	【実践内容　5】 ・生徒が既に知っていることと教科書の題材との関連性に気がつかせ，情報や意見を伝え合う。 【実践内容　1】 ・本時のゴールについて，ゴール像を示し，見通しをもたせ，生徒の意欲・関心を高める。
	Today's Goal: 50億羽もいたリョコウバトが絶滅した理由を英語で簡潔に説明できる。	
展開（35分）	4　キーワード（読前に提示する単語）の例示 【Reading】 5　本文を読んで，Q&Aに取り組む。 (1)ペアで実際に質問をしあう形で答えを確認させる。 (2)あてられた生徒は黒板に答えを書く。 6　黒板の解答をペースに，生徒との対話しながら内容理解を促す。 7　ワードマップの作り方を説明し，マップを作りながら本文をもう一度読む。 【アウトプット活動】 8　ワードマップをもとにストーリーテリング。 9　マップを修正させたうえで，相手を換えながら何度も練習する。 ◎マップを活用し，試行錯誤を繰り返しながらも要点を整理し，相手に伝えている。 ・マップに記入しているキーワードが少なく，時間を持て余している。	・英語とジェスチャーのみでキーワードを類推させる。 ・制限時間を設定して読ませる。 ・何を読み取るかを明確にして読ませる。 【実践内容　5】 ・生徒同士のやりとりの場面を増やす。 ・話し手は相手に伝わるように，聞き手は聞き取ったことが伝わるように，それぞれ相手意識を持ちながらやりとりする。 【実践内容　7】 ・ペアを何度も変えながら，発表させることで，お互いの発表から伝えたい内容や表現を交流することを通して，工夫できる点やよかった点について交流し発表内容の質の向上を目指す。
終末（5分）	10　振り返り (1)本時のゴール「リョコウバトがなぜ絶滅したか」を確認 (2)話したことを整理しながら書く (3)単語（ワードハント）は宿題	【実践内容　8】 ・自分が表現した内容を書く統合的な活動を取り入れ，既習事項の深い定着を促す。

◆実践内容１～３は「主体的な学び」の手立て，実践内容４～６「対話的な学び」の手立て，実践内容７～８は「深い学び」の手立てを示しています。

※詳細は，ガイドブック（中学校については p20，高等学校については p26）をご覧下さい。

Ⅴ　成果と来年度に向けて

【成果】

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善について，授業改善の方策を構想し，実践を通して具体的な考え方と学習活動を示すことができました。

【来年度に向けて】

来年度は，研究協力校および研究協力員，研究担当者による実践を予定しています。その中で得られた知見の整理とデータの分析・検証を行い，「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善を通しての，資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業の在り方について，報告書並びにガイドブック等を通して広く普及していく予定です。

研究報告書とガイドブックは，下記の岩手県立総合教育センターのＷｅｂページに掲載しております。
また，本研究総論も掲載しておりますので，併せてご覧下さい。
http://www1.iwate-ed.jp/kkenkyu/kankou/172cd/h28ken.html